栃木県小山市・居心地が良く歩きたくなるまちなか再生

～小山駅を中心とした公共空間活用と地域公共交通改善～

脇本　和樹*

小山市は公共空間（街路、公園、水辺）の利活用と地域公共交通再生を組み合わせた、居心地が良く歩きたくなるまちなか再生プロジェクトに取り組んでいる。本稿では、まちなかで実施しているプロジェクトの概要及び効果を紹介する。

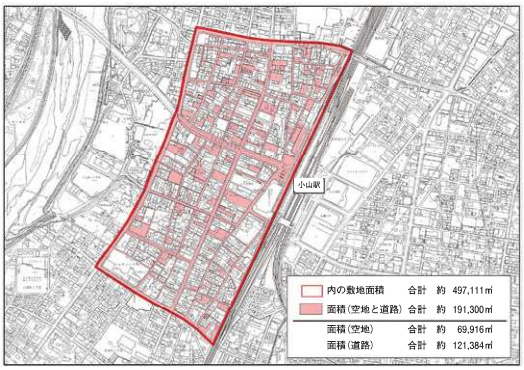
1. はじめに

栃木県小山市は、JR小山駅で東北新幹線（東京まで42分）、宇都宮線、両毛線、水戸線が交差し、国道４号と50号が交差する交通の要衝にある。

この立地利便性を活かした移住定住施策が功を奏し、全国では人口減少が進む中で、1930年以降人口増加を続け、栃木県第２位となる16.7万人を有する都市となっている。

2. 小山市の課題

小山駅西口地区は、人口が増加している東口地区とは対照的に、人口減少が顕著であり、1970年当時は約9,300人だった人口が、半分以下の約4,100人まで減少し、小山市で最も過疎化が進んだ地域である。また駐車場が多く、地区面積の14％が低未利用地であり、市全体の空き家率1.4%に対して、本地区は2.6%と倍近くとなっている。



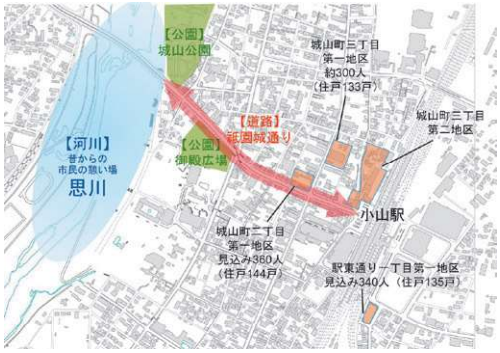
図－１　小山駅西口・駐車場等分布図

地価の下落も著しく、西口地区を中心とした商業地域の土地評価額の平均額は平成初期では235,581円/㎡あったものが、2019年では48,416円/㎡と低下している。

この課題に対して、小山市では、再開発を中心としたまちなか居住の推進と併せて、住む人、来訪する人が「居心地が良く歩きたくなる」まちなかづくりを推進し、まちなかの再生を目指している。

3. 公共空間の利活用へ向けて社会実験開始

イベント時には人で賑わうが、日常では人通りが少なく閑散としていることが多い公共空間を人間中心の魅力ある空間に再生させるため、小山駅から１km圏にある「街路」「水辺」「公園」を対象に社会実験等を実施している。



図－２　小山駅を中心とした公共空間

１）街路空間の利活用（シンボルロード、復活）

小山駅から伸びる「祇園城通り」（幅員25m、う

＊前小山市 都市整備部 都市計画課 都市政策係 技師　　0285-22-9203
（現小山市 都市整備部 新都市整備推進課 小山駅西口再開発推進室 小山駅西口周辺 地区推進係 技師）

ち歩道幅員両側幅員13m）は市のシンボルロードであり、無電中化、歩道の美装化整備が行われているが、沿道には店舗が少なく、駐車場や空き地が多く点在しているため人通りが少ない。そこで「祇園城通り」に人の流れをつくり、沿道の空き地への出店促進を目的に、５店舗参加で2019年３月30日から23日間と、７店舗参加で2019年７月26日から61日間、歩道をオープンテラス化する社会実験、「＃テラスオヤマ」を実施した。店舗と連携し、歩道にテラス席（椅子とテーブル）を設置し、様々な「座り場」を作りだした。これにより、歩道に滞留場所ができ、街路が人々の交流の場へと変わりだし、気軽に立ち寄れる目的地となり、店舗の利用にも波及している。祇園城通りの歩行者数は、2018年は2,247人で、2019年は2,696人と、449人（20％）増加し、新たに３店舗の飲食店が出店した。2020年は、常設に向けて協力店舗と協議を進めている。

写真－３　「＃テラスオヤマ」の様子

写真－４　賑わう祇園城通りの様子

２）水辺空間の活用（再び輝きだす市の象徴）

市の象徴であり、市域を南北に流れる「思川」は昔から市民の憩いの場で、昭和40年代は子供たちの遊泳場となっていたが、現代では水辺は「危険」との教えが広がり思川に集う人は少なくなっている。

そこで「思川」をもっと身近に感じ、人々が集う場所とするため、アユのつかみどりイベント「おやま思川アユ祭り」を毎年８月、2019年に19回目を開催した。

第19回目は、東京圏へSNSの情報発信を行い、広く参加募集をしたところ、前回の参加者1,129人を大きく上回る1,674人が参加し、全体の約40％の708人は県外（特に首都圏）からの参加であった。

さらにアユ祭りの会場に隣接する城山公園の再整備計画（2018年３月策定）に、河川敷と公園の一体的整備を行い思川の水辺を活用して賑わいを創出する事業を盛り込んでおり、計画の実現のため、アユ祭りに併せて、社会実験（ラフティング、ライフジャケット浮遊体験、水生生物観察）を実施した。

社会実験は抽選になるほどの人気となり、187人が参加。この実験で、思川が現代でも、人が集う場所となりうる可能性を示すこととなった。

写真－５　おやま思川アユ祭りの様子

写真－６　社会実験（ラフティング）の様子

３）公園空間の活用（史跡広場、保存から活用へ）

小山御殿広場は、小山駅から西へ800m進んだ地点にある広さ1.6haの史跡芝生広場であり、以前は市主催のイベントが開催されるだけの場であった。

まちなかの活性化を目的に、2018年４月から民間事業者のイベント許可を開始、年に数回、民間イベントが行われ、来場者数は、最大で約20,000人となることもある。これらのイベントにより、一時的には、賑わいが生まれるが、普段はほとんど人が

訪れることがない。その状況を変えようと2019年３月からは市職員がSNSを通して市民に呼びかけ、ランチやピックニック、遊び場等としてイベント以外にも気軽に公園を利用できる空間へと誘導している。

広場での交流の輪が広がり、子育て世代からの広場を活用したいとの声に応え、市内の子育て世代のママ達が実行委員会を作り、マルシェ（約65店舗出店）を2019年６月と2019年10月の２回開催した。

その結果、一回あたりの来場者数、約8,500人と市内外からたくさんの親子連れが来場し、多彩な飲食店・雑貨店で買いものを楽しむなど、これまで無かった風景を作り出し、まちなかへの更なる商業店舗出店の可能性を示す結果となった。

写真－７　ピクニックマルシェの様子

4. 地域公共交通の改善

まちなかへの自動車以外での来訪手段を確保するため市内唯一の公共交通バスであるコミュニティバス「おーバス」を運行している。路線網は、まちの中心にある小山駅等から放射状に14路線運行されており、市域のほぼすべてがカバーされている（人口カバー率95.9％）。しかしながら、運行本数は多いとは言えず、平成30年に実施したパーソントリップ調査では、バスの交通機関分担率は0.3％と他の地方都市の平均2.4％と比較して、非常に少ない状況にある。

このため、更なる利用促進策として全国でも類を見ない最大７割引の超低価格でかつ、全線を乗り放題の定期券「おーバスnoroca」を2019年10月に導入した。これに加えて、noroca販促、路線図、時刻表、おーバスの歴史等の情報を掲載したタブロイド紙「Bloom!」を制作し、市内自治体加入全戸６万世帯に配布するモビリティ・マネジメント※を実施している。

長年続けてきた路線改善と、前述した取り組みにより、利用者数は年々増加しており、2010年は約37万人であったものが、2019年度は約72.9万人になり、収支率は2018年栃木県２位となっている。

5. 変わりだす小山のまちなか

「街路」「公園」「水辺」がまちなかの回遊の拠点となり、まちなかへのアクセス手段充実と相まって、まちなかでの滞在時間や行動範囲が広がり、まち全体の賑わいの創出に波及している。前述した社会実験やイベントは、回を重ねるごとに新たな参加者が集い、人々の憩いの場として定着し始めている。

その緩やかな交流は人の輪を作り、公共空間及びまちなかに魅力を見出した民間プレーヤーを創出・発見でき接点を持つことにつながっている。イベント等で行政が率先し、公共空間の活用の可能性を示してきたからこそ、公共空間に可能性を見出し活用したい市民が続出したのである。

今後は、まちなかに点在する低未利用地をまちのポテンシャルと捉え、イベントや市民の活躍の場として利用できる空間になることを期待し、行政と民間が協力して高度利用を検討していく。

6. おわりに

これらの実験を通して、新幹線停車駅から歩いて行ける距離にある、この恵まれた環境を活用することで、さらに賑わいを創出できると確信した。

小山のまちなかは、人が集まることで笑顔があふれており、いつのまにかに“ひと”と“出会うこと”が日常（あたりまえ）になってきた。

首都圏から近く、ちょっと気になるまち、小山市。「さて、今度の休日は小山市にいってみようかな。」

皆様のお越しをお待ちしております。

【用語解説】

※モビリティ・マネジメント……「過度に自動車に頼る状態」から「公共交通や徒歩などを含めた多様な交通手段を過度（＝かしこく）利用する状態」へと少しづつ変えていくため、ひとり一人の住民や、一つ一つの職場組織等に働きかけ、自発的な行動の転換を促していく一連の取り組み